

高大連携 実践報告

神田外語大学・都立白鷗高等学校附属中学校

オンラインによる連携授業

～コミュニケーションデザインへの理解深化を目的として～

宮崎 愛弓 Ayumi MIYAZAKI†

石井 雅章 Masaaki ISHII††

田中 佐岐子 Sakiko TANAKA†††

本学は、都立白鷗高等学校附属中学校と高大連携に関する協定を結び、その取り組みの一つとして、オンライン連携授業を実施した。本学学生が、中学1年生の総合の学習にZoomで参加し、中学生のパンフレット制作のアドバイスを行うといった新しい取り組みである。本学学生は、オンラインファシリテーションとパンフレットに対するグラフィックデザインのアドバイスを経験し、広義のコミュニケーションデザインとして“相手にわかりやすく正確に伝える”ことの重要性を再考する機会となった。また、附属中学の生徒も、より年齢の近い大学生に気軽に相談でき、活発な意見交換もされ、授業に対する満足度も高いものとなった。この連携授業プログラムは2021年度も予定されており、オンラインを活用した高大連携授業という新たな試みとして、モデルケースとなることを目指し、本稿では、その実践を報告するとともに可能性を探る。

キーワード：高大連携、オンライン授業、グラフィックデザイン、ファシリテーター

1. はじめに

1.1. プログラム背景

文科省の資料によれば、“中高一貫教育や現行学習指導要領の実施等により高等学校の多様化と選択の幅の拡大は更に進展し、(中略)特定の分野について高い能力と強い意欲を持ち、大学レベルの教育研究に触れる機会を希望する生徒の増加を予想される”としている。そして、“このような生徒の能力・意欲に応じた教育の実現を目指してく為には、「高等学校教育」或いは「大学教育」のいずれか一面のみから論ずるべきではない。(中略)生徒一人一人の能力を伸ばすための、高等学校・大

† 神田外語大学 非常勤講師

†† 神田外語大学 グローバル・リベラルアーツ学部 教授

††† 東京都立白鷗高等学校・附属中学校 主幹教諭

学双方が連携した教育のあり方を検討してく”必要があるとしている^[1]。その連携強化の在り方の一つとして、高等学校教員と大学教員の相互理解を促進していくために、高等学校教員と大学教員の交流・連携ネットワークが様々な形で構築されることが重要とされている^[2]。

本学では、2020年4月に産官学・地域連携部という新しい部署を発足し、2020年度においては、6校と高大連携協定を締結するなど、高大連携(接続)に力を注いでいる^[3]。都立白鷗高等学校附属中学校(以下、附属中学とする)とは、2020年9月に高大連携協定を締結し、その取り組みの一つとして、オンライン連携授業を実施した(2020年10月～11月)。本学学生が、附属中学1年生の総合学習にZoom¹で参加し、中学生のパンフレット制作に対しアドバイスをを行うといった新しい取り組みである。本学学生は、Zoomを活用したオンラインファシリテーションと、パンフレット制作に対するグラフィックデザインのアドバイスを経験し、広義のコミュニケーションデザインとして、“相手にわかりやすく正確に伝える”ことの重要性を再考する。

1.2. 本稿の目的

コロナ感染禍の自粛要請により大学構内への入校は制限され、大学をはじめとする教育期間は、学びを持続する為、オンラインやオンデマンドの遠隔授業が推進された。文科省の「大学等における後期等の授業の実施方針等に関する調査(2020年8月25日～9月11日に実施)」によると“後期授業では、ほぼ全ての大学が対面授業を実施、うち8割が対面と遠隔の併用を予定している”と明らかにしている^[4]。一方、前回調査(2020年7月1日時点)では、約2割が全面对面、約6割が併用、残り2割が全面遠隔であったとされている^[5]。こうした背景には、コロナ感染禍における教育現場におけるICT活用が一挙に進んだことで、対面授業と遠隔授業の各々に長所があることが明確になり、広く認知されたと推察される。今後は、各々の良いところを取り入れた新しい教育方法の開発を推進していくことが求められるだろう。

附属中学との高大連携授業プログラムは、2021年度も予定されている。オンラインを活用した高大連携授業という新たな試みとして、モデルケースとなること

¹ Zoom ビデオコミュニケーションズが提供するクラウドコンピューティングを使用した Web 会議サービスの名称。Zoom サービス内にミーティングルームを開設し、ミーティング ID やパスワードを共有するユーザー同士で多地点と同時に Web 会議を行うことができる。

を目指し、その実践を報告するとともに、可能性を探る。

2. オンライン連携授業の概要

本章では、連携授業の趣旨や実施概要を記す。また連携授業で使用した Zoom や Canva²といったオンラインツールについて詳述する。

2.1. 連携授業趣旨

附属中学では、1 学年の総合的な学習の時間において「上野浅草プロジェクト」が遂行された。その取り組みの中で、上野浅草にある名所・旧跡に、より多くの人々が足を運んでくれるようなパンフレットを作成することを目標に活動が行われ、連携授業では、附属中学の生徒が行うパンフレットデザインに対し、本学学生がオンラインでアドバイスをするというものである。附属中学の生徒は、大学生から直接アドバイスを受けることで、効果的な情報提供について理解を深め、制作物の制作など教育活動の充実を図る。一方、本学学生は、グラフィックデザインについて学んだことを相手に教えることで、学習定着率を高めることを目的とした。また、オンラインでの連携授業は、ブレイクアウトルームを活用し、グループごとに活動が進められた。大学生 1 名に対し、附属中学 2~3 チーム (1 チーム 4 名程度) を 1 グループとして事前に割り当てられた。従って、本学学生は、オンラインでのファシリテーションの経験を通じ、必要なスキルを涵養すると共に、効果的なオンライン・コミュニケーションについて再考するきっかけを得ることを狙いとした。

2.2. 連携授業実施日時、参加生徒・学生について

連携授業実施日と時間、参加生徒と学生については下記の通りである。

1. 連携授業実施日・時間

実施日：10 月 16 日(金)、30 日(金)、11 月 6 日(金)、13 日(金)、20 日(金)の全 5 回

時間：附属中学時間割における 6 時間目(14:45~15:30)・7 時間目(15:40~16:25)

※附属中学 1 年生 4 クラスは 2 クラスずつに分かれ連携授業に参加

² 2013 年にオーストラリアで誕生した、オンラインで使える無料のグラフィックデザインツール。スマートフォンやタブレットなどのモバイル端末のアプリにも対応。豊富なテンプレートや無料素材(写真やイラスト)、目的にあったフォントの数々を利用し、オリジナルのデザインを作ることが可能。

2. 実施方法

遠隔会議システム Zoom を利用したオンライン連携

3. 参加生徒・学生

附属中学：1年生 4 クラス(1 クラス 40 名程度)

神田外語大学：学部生 14 名(2 年生 5 名、3 年生 3 名、4 年生 6 名)

全 5 回の連携授業は、附属中学の時間割に合わせて行われた。附属中学の生徒は、1 年生 4 クラス(1 クラス 40 名程)が 2 クラスずつに分かれ、学活の時間と入れ替わる形で連携授業に参加した。本学学生は、当該時間帯に Zoom で参加(6 時間目に 10 名、7 時間目に 7 名)した³。参加学生は、グラフィックデザインIIA⁴の履修生と、学内応募を通じて参加した学生の計 14 名である。

2.3. オンライン連携授業の流れ

オンライン連携授業では、予め参加生徒と学生を合わせたグループを編成し運用した。附属中学 4 クラスを 1 クラス 10 チーム(1 チーム 4 名程度)に分け、それを更に、本学学生の参加人数に合わせてグループを編成(1 グループ 2~3 チーム)した。使用する Zoom は、附属中学の担任によりスケジュールされた 1 つのミーティングルームで、附属中学は 1 チームに 1 台のパソコンが用意されミーティングルームにアクセスした。一方、本学教職員及び学生は、共有されたミーティング ID とパスワードを用い、各々の端末からアクセスして授業に参加した。連携授業開始・終了時は、メインルームにて附属中学担任による一斉指導が行われ、それ以外の作業時間はブレイクアウトルームを利用し、本学学生のファシリテーションのもとグループごとに進行された。大まかな流れは下記の通りである。各回の授業内容は 3 章で詳述する。

オンライン連携授業の大まかな流れ

- Zoom 入室
- 連携授業開始/課題の確認(メインルーム) 5 分
→附属中学担任により、配布されたワークシートをもとに当日の流れと課題の確認を行う

³ 3 名が 6 時間目と 7 時間目の両方に参加した

⁴ 本学の授業で、コミュニケーション研究科目の一つである。コミュニケーションの 3 要素、コミュニケーションモデル、心理効果、認知科学など、主に人を対象としたコミュニケーションデザインの解説と課題を通じ、ビジュアルコミュニケーションデザインへの理解深化に繋げることを目的とする授業である。

- ブレイクアウトルームに移動/作業時間 34分
※ホスト(附属中学担任)と共同ホスト(大学教員・職員)はルームを歩き来して進捗状況を確認
- 学習のまとめ(メインルーム) 6分
→大学教員による全体講義と学びの振り返りを行う
- 連携授業終了(Zoom 退出)

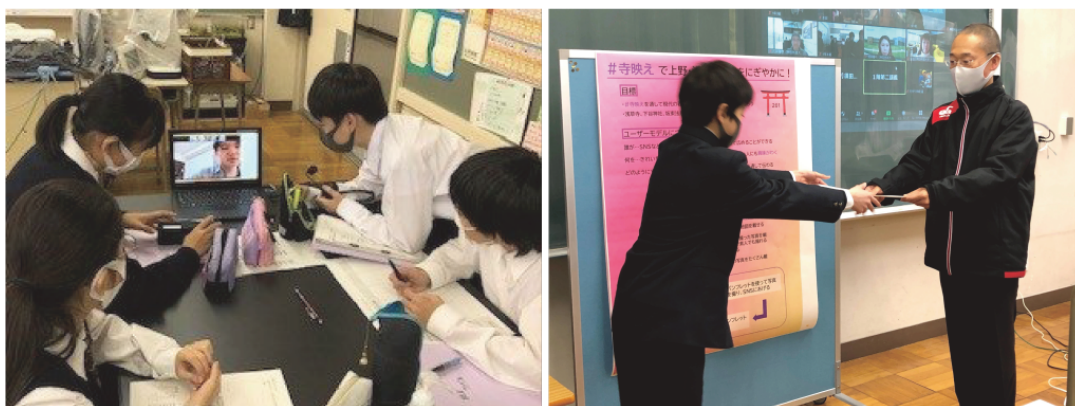


図 2-1(左)高大連携授業の様子(附属中学にて)

図 2-2(右)優秀チーム発表会の様子(附属中学にて)

2.4. オンラインツールの活用

オンライン連携授業では、Zoom の他に、Canva や Slack といったオンラインツールを活用した。各ツールの概要と活用事例について詳述する。

2.4.1. オンライングラフィックデザインツール「Canva」

附属中学の生徒は Canva を使用し、パンフレットをデザインした。Canva は、豊富なテンプレートの中から目的に応じたテンプレートを選ぶことができ、テンプレートに情報を流し込む形で、デザイン初心者でも簡単にオリジナルのデザインを作ることが可能である。また写真やイラスト等の素材、多様なフォントを無料で利用(一部有料)することができる。即ち、Canva を使用することで、ツールを扱う為に必要な専門的知識・技術教育に偏重することなく、相手にわかりやすく伝えるとはどういうことか? など、ビジュアルコミュニケーションデザインの本質について、理解を深めてもらう機会が得られると考え、Canva を導入した。

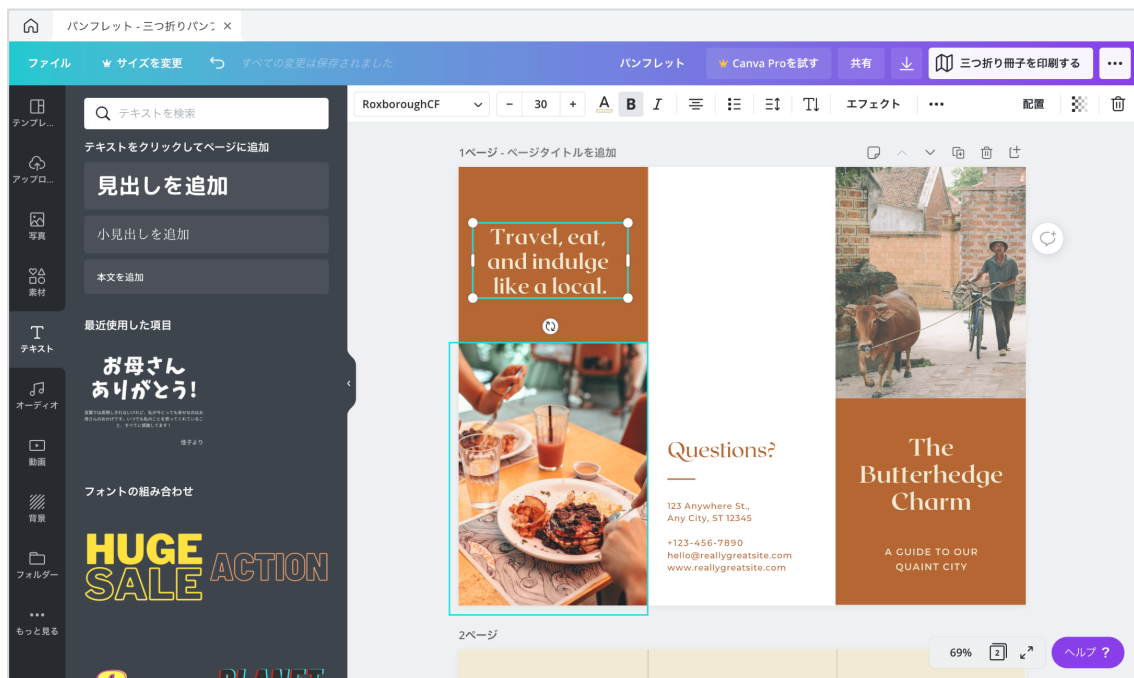


図 2-3 Canva の編集画面例

また Canva は、ブラウザで使用することができ、他のメンバーと共有するとデザインを閲覧もしくは編集することができる。生徒は自宅にある端末(パソコンやタブレット、スマートフォンなど)から Canva にアクセスして作業を続けることが可能となり、教員や大学生は各グループの進捗をオンラインで確認し、必要に応じてアドバイスを行うことが可能となった。現在 Canva では、学校向けに更に多くの価値を提供していくとして、Canva for Education を立ち上げ、Canva Pro へのアクセスに加え、世界中の教師や学生に無料で提供するクラス用のアドオンを提供している。また実際の教育現場では GIGA スクール構想実現⁵に向け、生徒一人一台の端末整備が整いつつあることから、今後はより多くの教育現場において Canva が使用されることが予想される。

本プログラムの最後には、附属中学 1 年生の総合学習のまとめとして、発表会や保護者から講評を受ける機会が設けられた。保護者からは完成度の高いパンフレットが多いことに、驚きと称賛の声が上がっていた。(生徒が実際にデザインしたパンフレットは 3.4. に貼付する)

⁵ 令和元年度補正予算案において、児童生徒向けの 1 人 1 台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備する為の経費が盛り込まれた。これにより、特別な支援を必要とする子供を含め、多様な子供立ちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育 ICT 環境を実現する構想である。

2.4.2. チームコミュニケーションツール「Slack」

本学の教職員・学生間の情報共有、コミュニケーションを図る為、チームコミュニケーションツール「Slack」を活用した。連携授業に参加した学生は、グラフィックデザインII A の履修者 11 名と、その他 3 名(計 14 名)で、連携授業の内容や資料共有は、連携授業前日のグラフィックデザインII A の授業内で行なった。その為、授業を履修していない学生に対しては、Slack で録画した授業の動画や資料の共有を行い、連携授業の内容を事前に理解しておくよう伝えた。質問等は、常時 Slack で受け付ける他、連携授業当日の昼休み時間帯に直前ミーティング(オンライン)を実施し、連携授業の内容や資料の再確認、補完を行なった。また連携授業後は、学生の所感を共有する為のスレッド⁶を立て、学生に投稿してもらい、その内容から、オンライングループワークでは見えづらいグループごとの様子・作業の進捗具合の把握に活用した。



図 2-4 連携授業後の感想を Slack で共有する様子

3. オンライン連携授業の内容

本章では、各回の連携授業の内容を詳述する。

3.1. 第 1 回「パンフレットに記載すべき情報を明らかにする ～カスタマージャーニーマップの作成～」

パンフレットはチームごとに「対象者(どのような人がパンフレットを見るの

⁶ Slack で投稿されたメッセージに返信する為の機能。

か)」、「対象施設(どのような施設を紹介するのか)」、「目的(対象者はどのような目的でパンフレットを見るのか)」が話し合わせ、デザインされた。連携授業1回目では、対象者が必要とする情報を明らかにする為に、カスタマージャーニーマップを作成した。カスタマージャーニーマップは、マーケティング施策を実践する際に欠かせない顧客の行動や思考を把握するための重要な考え方である。時系列で顧客の行動・思考・感情を可視化し整理することで、今まで見えなかった顧客課題を発見することができるツールである。パンフレットを制作する前に、カスタマージャーニーマップを使い、対象者が対象施設で目的を達成するために、どのような行動を行うか整理し、その行動の際にどのような気持ちになるかを想像する。対象者の行動や感情を可視化することで、対象者が必要とする情報、即ちパンフレットに載せるべき内容を明らかにすることを目的とした。図3-1は生徒に提示したカスタマージャーニーマップの例である。

ユーザーモデル	一人暮らしのアラフォーOLが、冬の朝食時にインスタントカップスープを作って飲む				
フェーズ	起床する	準備する	作る	飲む	片付ける
行動ステップ	布団から出る 上衣を羽織る スリッパを履く 暖房をつける トイレに行く 手を洗う	お湯を沸かす 食器を手に取る スープを選ぶ	カップに粉を入れる テレビをつける お湯が沸くのを待つ 沸いたお湯を入れる スプーンで混ぜる	カップを持つ テレビの前に座る フーフー混ぜながら飲む 混ぜながら飲む 飲み終わる	流しに持ってく 置いて水を流す 放置
思考	起きなきゃ 眠い 寒い… 寒い寒い寒い	冷たい 冷たい なに飲もうかな 甘いのがいいな	ストーブついた あったかあ〜 お湯沸いた あ、スプーン 混ぜなきゃ 寒い寒い	溶けきったかな 暑いか 何着てこう あっちい 小あ〜 支度しなきゃ 行きたくない	寒っ 洗うのめんどくさ 顔洗わなきゃ
感情					
使う道具	上衣・スリッパ ストーブ タオル	ポット カップ インスタントスープ	カップ ポット リモコン スプーン	カップ スプーン	カップ スプーン 水道蛇口

図3-1 カスタマージャーニーマップの例

カスタマージャーニーマップを構成する項目は上から、パンフレットを利用する対象者を記載する「ユーザーモデル」、対象者が段階的にどのような行動をするのか記載する「フェーズ」「行動ステップ」、各フェーズ/行動ステップにおい

て、対象者はどのようなことを考え、どのような感情になるのかを想像して記載する「思考」「感情」、各フェーズ/行動ステップにおいて「使う道具(パンフレット以外にどのようなツールを使用するか)」を記載する項目がある。生徒たちは、これらの項目について、大学生のファシリテーションのもと、チームごとに話し合いながら考えをまとめて記入する。これらの作業を通じ、最後に対象者がどのような情報を必要とするのか＝パンフレットに記載すべき情報を明らかにした。

3.2. 第2回「視覚的にわかりやすいデザイン表現について知る」

連携授業2回目では、視覚的にわかりやすいデザイン表現について理解してもらう為、わかりやすく伝わるデザインのポイントを解説し、実際の制作物の事例を見ながら何がどうして見づらいのか・改善すべきところを話し合うワークを実施した。ブレイクアウトルームでグループごとに別れた後、まず前時に実施したカスタマージャーニマップで明らかになった情報をグループ全体で共有した。次に、レクチャーのポイントがまとめられた資料をもとに、大学生がわかりやすく伝わるデザインのポイントを解説した。生徒はレクチャーを受けた後、予め配布された制作物の事例を見ながら、何がどうして見づらいのかチームごとに話し合った。大学生のレクチャーを思い出しつつ、下表のチェックリストをもとに話し合いが行われた。最後に、大学生のファシリテーションのもと、見づらいと感じたところ、どのように改善したら見やすくなるのかをチームごとに発表した。

表 3-1 視覚的にわかりやすいデザイン表現に関するチェックリスト

文字の見やすさ	大きさ・太さ	文字が大きすぎたり、小さすぎたり、太すぎたり、細すぎたりしていませんか？
	行間・文字間	行と行や、文字と文字が詰まっていて読みづらくなっていませんか？
	フォントの種類	フォントの種類は統一されていますか？
色の使い方	色数	たくさんの色を使いすぎていませんか？
	色の使い方	色の使い方にルールはありますか？統一されていますか？
情報の配置	情報量	文字や図(写真やイラスト)のどちらかが多すぎたり、両方が多すぎたりしていませんか？
	情報の配置	文字や図(写真やイラスト)は揃えて整えられていますか？
	導線	人の視線の動きを意識して、文字や図(写真やイラスト)が配置されていますか？

3.3. 第3-5回「Canvaでパンフレットを作成する」

連携授業3-5回目では、生徒が実際にオンライングラフィックデザインツールCanvaを使用しパンフレットを作成した。連携授業3回目は、Canvaの基本操作に関するレクチャーを行い、情報や素材配置等のレイアウト検討が行われた。まずメインルームにて、本学教員がCanvaの基本操作に関するレクチャーを行った。Canvaのログイン方法⁷、パンフレットのテンプレートの選び方、編集画面における各ツールの紹介・操作方法等の説明を行った。その後、ブレイクアウトルームでグループごとに分かれ、テンプレート選び、選んだテンプレートをもとに、情報や素材をどこに配置するか等のレイアウト検討が行われた。4回目の連携授業では、著作権・肖像権に関するレクチャーを行った後、注意点をふまえてCanvaを使用したパンフレット作成が進められた。5回目の連携授業も引き続きパンフレット作成が進められた。Canvaは、目的に合ったフォントや色の選択、クオリティの高い写真やイラスト等の素材が豊富で、附属中学の生徒は、より自分たちのイメージに近いパンフレットを作成することに夢中になる様子が見られた。大学生は適宜、グループ全体で共有する機会を作り、チームごとに画面共有⁸してもらいながら、作成中のパンフレットに対しアドバイスをを行った。生徒は、他チームが受けたアドバイスを自分のチームに置き換えることで、考えるきっかけとなり、更にブラッシュアップに繋がっていた。パンフレットが形になるにつれ、オリジナルのイラストをパンフレットに貼付する方法や、GoogleマップのリンクをQRコード化する方法を知りたい等の様々なリクエストが挙がっていた。大学生はリクエストに応じたレクチャーを臨機応変に実施するなど、オンラインファシリテーションのコツを掴み、スキル習得に繋がっているように見受けられた。

3.4. デザインされたパンフレット/優秀チーム発表会

Canvaはインターネットに接続可能な端末からアクセスして使用できるツールである。全5回の連携授業内でパンフレットを完成出来なかったチームやブラッシュアップしたいチームは宿題として持ち帰ることができた。そうして、全40チームのパンフレットが完成した。その後、プレゼンテーション学習が実施され、お互いがデザインしたパンフレットをプレゼンテーションし、評価し合うポスターセッ

⁷ ログイン用のメールアドレス・パスワードは、附属中学の教員がチームごとに予め設定し、チームリーダーに伝えた。

⁸ Zoomで、自分のパソコンのデスクトップ画面や、ミーティング中に実行・表示されている様々なアプリケーションの画面を相手の画面に映すことができる機能。

ションが行われた。その中で、高い評価を得た代表の4チームが優秀チーム発表会にて発表を行った。その内の1チームのパンフレットを貼付する(図3-2)。発表会には、本学学生や教職員はZoomで参加した(図2-2)。優秀チーム発表後、全体講評を行い、附属中学生徒の保護者によって選ばれた保護者賞、本学学生によって選ばれた神田外大賞、それぞれの表彰が行われ、高大連携授業プログラムは終了した。



図3-2 附属中学の生徒がデザインしたパンフレットの表紙(左)と中身(右)

4. まとめ・振り返り及び考察 ～オンラインでの高大連携授業について～

本学は、2020年度に都立白鷗高等学校附属中学校と高大連携に関する協定を結び、その取り組みの一つとして、オンラインを活用した高大連携授業を実施した。附属中学との連携授業は2021年度も予定されている。オンラインを活用した新たな試みとして、モデルケースとなることを目指し、振り返り及び考察を行う。

2020年度はコロナ感染禍の自粛要請によりICTを活用した教育方法が急速に普及した。附属中学や本学においてもオンライン授業が経験されていたこともあり、今回のZoomを活用したオンラインでの連携授業は、教員のみならず生徒や学生も比較的戸惑いが少なく、滞りなく進んだように思われた。附属中学の生徒や本学の学生も、授業が進むにつれ緊張感も解れ、円滑なコミュニケーションが取れていたように見受けられた。今回の連携授業では、大学生1人に対し、中学生2~3チームを1グループとし、振り分けが行われた。Zoomでは複数人が同時に話すと会話が聞き取りづらくなってしまふ。その為、附属中学では、他チームと学生が会話している時、またハウリング防止の為、マイクをミュートにする機会も少なくなく、学生は担当するチームの作業の様子を把握しづらい状況にあったと思われる。学生は適宜、グループ全体で共有する機会を作るなど、全てのチームと均一にコミュニ

ケーションが取れるようファシリテーションする必要が生じた。今回のグループ分けでは、他チームが受けたアドバイスを自分のチームに置き換え、考えることで、気づきを得るきっかけが生じていたと考える。その一方で、授業時間という限定された条件枠組みの中においては、もう少し大学生と中学生個々が直接会話する機会を創出する必要性が感じられた。今後は、大学生1人に対し中学生1チームを振り分ける等、双方が積極的にコミュニケーションを取れるような場作りが必要であると考え。そのような振り分けを行い、作業中はマイクを常時オンにしてもらうことで、中学生の会話の内容からチームの様子・作業の進捗を観察し、適切なタイミングでアドバイスを行えると考える。より深いコミュニケーションへと繋げ、連携授業という一時的な取り組みにおける交流に留まらず、双方が自発的にコミュニケーションを行うきっかけ作りになるよう、効果的な高大連携授業を模索していきたい。

最後に、附属中学の先生方には、オンラインでの連携授業を遂行するにあたり、現地において様々な面からサポートして戴いた。特に毎授業開始前に、附属中学の生徒10チームが一度にZoomへ接続するパソコン、スピーカーやマイク等の周辺機器をハウリングしないよう各教室に設置した上で接続テストを実施するなど、通常授業準備の倍以上の時間を要していたと推察する。ICT教育はメリットが多く、活用できれば効率的な学習を行うことも可能であると考え。本学では、2021年度前期の授業から対面形式での授業を再開することが予定されているが、授業によっては、2020年度のオンライン授業運営で開発された効果的な教育手法や教材を活かし、オンライン形式を継続するとの方針が示されている。コロナ感染禍において急速に普及したICT教育だが、今後は対面授業と遠隔授業、各々の良いところを取り入れた新しい教育方法の開発が推進されていくだろう。それと同時に、物理的環境である学内(校内)設備のICT教育への早急な対応が求められている。

謝辞

この度の貴重な機会を与えて戴いたこと、連携授業遂行にあたり多くの関係者にお力添え戴いたことに謝意を表す。

東京都立白鷗高等学校・附属中学校 中学校開発部主任 田中佐岐子先生には、連携授業全体の指揮として、毎授業ごとのZoomの開設及び操作を含めた授業進行、また教職員のオンライン打ち合わせの場を設けて戴いた。また、附属中学において

授業に参加した1学年全体のとりまとめ及びご指導、毎授業ごとに配布する資料作成など多岐にわたりご尽力戴いた。ここに深謝の意を表す。また、同校 高等学校開発部主任 久保田裕人先生、同校1学年担任 後藤敦実先生には、オンラインでの打ち合わせにて連携授業の内容を考えるに当たり有益なご討論ご助言を戴いた。ここに謝意を表す。更に、同校1学年をご担当された先生方には、オンラインでの連携授業を遂行するにあたり、教室の環境整備や授業中の接続トラブル等、現地において様々な面からサポートして戴いた。ここに謝意を表す。

神田外語大学 グローバル・リベラルアーツ学部 石井雅章先生には、この度の貴重な機会を与えてくださるとともに、連携授業計画や本稿執筆において、様々な面からご指導及びご助言を戴いた。ここに深謝の意を表す。また、神田外語大学 産官学・地域連携部 玉造美恵氏及び、その関係職員の皆様には、連携授業参加学生の募集や修了証の郵送など、連携授業遂行にあたり様々な面においてお心遣いとサポートを戴いた。ここに謝意を表す。

最後に、この度の連携授業遂行にあたって、多方面の関係者並びに、授業に参加した数多くの生徒・学生にご協力戴いたことに感謝の意を表す。

参考文献

- [1] 文部科学省「3.高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携(高大連携)の在り方について」、最終更新日 2019年11月15日、アクセス日 2021年4月29日
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/06040408/001/004.htm#top
- [2] 高等教育局大学振興課大学改革推進室「報告書 一人一人の個性を伸ばす教育を目指して」文部科学省、2007年3月22日、アクセス日 2021年4月29日、
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/07032207.htm
- [3] 神田外語大学「産官学・地域連携部」アクセス日 2021年4月29日、
<https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/main/labo/renkei/>
- [4] 文部科学省「大学等における後期授業の実施方針の調査について（令和2年9月15日）」、2020年9月15日、アクセス日 2021年4月29日、
https://www.mext.go.jp/content/20200915_mxt_kouhou01-000004520_1.pdf
- [5] 文部科学省「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況（令和2年7月1日時点）」、2020年7月17日、アクセス日 2021年4月29日、
https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf